ふれる・かんじる・たのしむ・いかす
～子どもの気付きの質を高める生活科～

1．研究テーマ設定の理由

（1）学校提案とかかわって

生活科は，子どもが本来もっている「みたい」「やりたい」「知りたい」「話したい」などの思いを存分に発揮しながら，ひと・こと・ものとのかかわりをひろげ，深めていく教科である。

今回の学習指導要領の改訂により，子どもの自然体験や人とかかわる活動がより重要視されることになった。自然の不思議さやおもしろさを実感する指導の充実や，子どもの気付きを明確化させること，伝え合い交流する活動の充実，安全教育や生命に関する教育の充実，幼児教育および他教科との連携等。

本校の生活科において，『学びの質を高める』とは，2 年間にわたり具体的な活動や体験を充実させることで，子どもの気付きの質を高め，実生活へといきる学びであると捉えている。また，第 3 学年以上の教科等の学習に効果的につながることであるとも考える。そこで，今年度の生活科研究テーマを「ふれる・かんじる・たのしむ・いかす　～子どもの気付きの質を高める生活科～」と設定した。

"ふれる"・・・・対象とであったり，かかわりあったりする課程。
諸感覚をフルにいかしてアプローチしていく。

"かんじる"・・・対象とのかかわりの中での，対象からの疑問や気付きがうまれる課程。
ゆったりと，時には繰り返しながらかかわっていく。

"たのしむ"・・・対象にじっくりとかかわりながら，気付きが更新されたりひろがったりする課程。子どもが「もっと・・・してみたい」「・・した方が・・」等，強い思いや願いをもち，実現につなげようとする姿につなげる。

"いかす"・・・子どものもつ強い思いや願い，時に気付きを実生活の中へ，活用・応用していこうとする課程。合科的な指導を取り入れながら，様々な生活場面で活用していけるよう，配慮していく。

⇩

これらの課程が相互にかかわりあう中で，対象・他者・自己との対話を深めていく。

①　生活科における協同的な学び

生活科における協同的な学びの第一歩は，具体的な活動や体験に子どもをじっくりとひたらせることだと考える。対象とのつながりを深め，みんなに伝えたいことを見つけたり，「もっと・・・してみたいけれどどうしたら」「・・・した方が・・よいはずだけど」等，問題意識がめばえた時，相談したい，一緒に考えてみたい等の思いをもつことになるだろう。そんな子どもの姿をみとりながら，ペア学習，グループや全体で交流する場面を設定していく。協同的な学びとは，それぞれが疑問や思いをもって行う複数での話し合い，課題解決の場をもつことによる学びのひろがりや高まりであると考える。

② 生活科における焦点化のポイント

学校提案に示されている「学びに向かわせていく焦点化」と「本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化」の２つについて，生活科では次のように考える。

〔生活科における「学びに向かわせていく焦点化」〕

◇日々の体験・経験の充実から課題を設定していく◇

子どもたちから主体的に課題がうまれるよう，日常から子どもたちの興味・関心をかきたてるものをたくさん体験・経験させておく。朝の会や終わりの会，学級活動の時間などの時間も積極的に活用したり，他教科との合科を図ったりしていくことで，日常生活そのものが学びにつながっていることを意識させたい。また，体験・経験の充実をはかることで，個々の子どもが，自分自身の思いやねがいを強くもたせておくことも，焦点化をはかるための重要な要素である。

〔生活科における「本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化」〕

◇「くらべる」「分類する」「たとえる」等の活動の意識化◇

子どもの生活範囲は様々であり，感じ方や視点も様々である。１つの課題について話し合っていても，子どもたちの視点がバラバラであったり，興味を感じているものが全く異なっていたりすることが多い。日頃から「くらべる」「分類する」「たとえる」等の活動を取り入れながら，子どもの視点や思考を整理していきたい。そうすることで，子どもたちが本時の中での課題意識を明確にして共有できたり，友だちの考えによりそったりできるのではないかと考える。

（２）生活科でめざす子ども像

① 自分が好き！と感じられる子ども　～自分自身のよさや可能性を感じて～

生活科では，子どもが自分の言動に自信をもち，自分のがんばりやよさを認められること，自己肯定感を育むことが大切であると考える。子どもが対象とじっくりかかわりをもつ中で，うまれる言動や気持ちに対し，教師や友だちが意味付けたり価値付けたりすることで，「〇〇したことはよかったんだ」とその子どもが自分のよさや可能性を自覚することになる。そして，「次は〇〇してみよう」「こうなりたい」という次への期待や希望をもって，成長していこうとする子どもの姿につながる。自分に自信をもって，自分が好きだと感じられる子どもであってほしい。

② 人とのかかわりがたのしい！と感じられる子ども
～人とのかかわりから学びのひろがりを感じて～

生活科では仲間とのかかわりだけでなく，他学年の子どもたちと交流したり活動したりすることはもちろん，「町たんけん」などを通して地域の方々とかかわることから学んでいくこともたくさんある。人とかかわることで，いろいろな知識が得られたり疑問が解決されたりすることも大切であるが，人と心地よくかかわるためには，あいさつやたずね方等の言葉遣い，マナーを身につけることも必要である。そんな心地よいかかわり方も身につけ，いろいろな人とかかわっていくことをたのしいと感じる子どもであってほしい。

③ たのしい！と夢中になれる子ども　～自然の不思議さやおもしろさを実感して～

“自然”のおもしろさやすばらしさにを実感する活動を取り入れていく中で，よりよいものを

求めて工夫をこらす子どもこそが，夢中になる子どもの姿であると考える。自然の不思議さやおもしろさはもちろんのこと，先人の知恵やアイデアに触れながら，よりよいものへと工夫し，実生活へとりいれていこうとすることのたのしさを実感してほしい。

２．生活科における「学びの質の高まり」

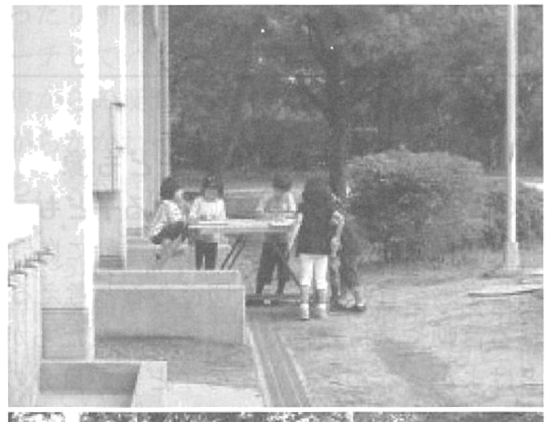
前述したように本校の生活科では，『学びの質を高める』とは，子どもの気付きの質を高め，実生活へ活用・応用することをたのしむ学びであると捉えている。生活科における“気付き”には「階層がある」と捉え，より高次の気付きに向かうための学習活動の工夫を試みていきたい。

① 感覚的な気付き → 「ちょうちょみたいな芽が出たよ」
② 発見的な気付き → 「前とはちがう大きな葉っぱが出たよ」（比較・関連づけ）
③ 思考的な気付き → 「お水をあげて元気になったから，ぐんぐん大きくなったよ。あさがおさんはお水が大好きなんだね。」（理由付け・因果関係）
④ 再認識の気付き → 「花がたくさん咲いたのは，新しい種をいっぱい育てているらだね。そのためにお水は大切だね。」（再認識・更新の気付き）

〔『小学校 新学習指導要領の展開』木村吉彦　編著　明治出版〕

気付きの質を高め，学びの質が高まっていくために，学習活動で気付いたことやふりかえりを行う時の絵や言葉による表現の変容をみとっていく。

◇気づきの質を高める実践例・・・１年生
“学校のふしぎ見つけたよ”より◇



子どもたちが学校をたんけんし，発見した“ふしぎ”を自分なりに理由付けしながら発表していった。その中で，「けれど，それやったら・・」と子どもたち同士のおたずねを通して，何となくふしぎに感じていた①感覚的な気付きがあった。「そうかなぁ。」とさらに考えをふかめながらインタビューや調べることを通して“ふしぎ”が“わかった”へと変わっていく。これは，②発見的な気付きや③思考的な気付きへと変容していったと考えられる。その“わかった”は次の“ふしぎ”の始まりとなり，子どもたちの活動が深まっていった。

一人の子どもの“ふしぎ”が，みんなに伝えたりおたずねを繰り返していく中で，共に考え合い，気づきの質が高まり，自己の変容が促されていくことになったと考えられる。

自己の変容をみとる手立てとして，絵や言葉による表現の変容があげられる。ある子どもが「排煙装置」を“ふしぎ”だと感じて，はじめに絵で描いたものは，そのものだけを描いていて，子どもの視点はぼんやりしていた。「電気を通すものかも・・・」と思っていたようである。しかし，

学んでいく中で，煙を逃がすものであることがわかると，単元の終わりに描いた絵には新たな視点が加わり，煙が一緒に描かれていた。

◇気づきの質を高める実践例・・・２年生
“ぼく・私の秋を見つけよう！”より◇

自分の秋を見つけるために，ワークシートをもって校内をたんけんした子どもたち。「色が赤や黄色に変化している葉っぱ」を秋だとイメージしている子どもは多い。はじめは色の違いに注目していたものの，いつものように葉っぱをさわったりにおいをかいだりしながらじっくり観察しはじめると，「落ちている葉っぱに色が変わっているのが多いね。」「でも，木についている葉っぱでも色が変わっているものがあるよ。」と気付きの幅をひろげていった。ある児童が木についている色が変わった葉っぱを引っ張ってみると，軽くちぎれた。「すごい！すぐにちぎれたよ」とびっくりしていたので「そうなの。どの葉っぱもちぎれやすいのかな」と問いかけてみた。試してみた子どもが「緑色の葉っぱは，力を入れないとちぎれないよ。」と再びびっくり。①感覚的な気付きが，比較することで②発見的な気付きへと変容していった。

そして，教室で自分が見つけた秋を発表し合った。「きっと，黄色や赤色のはっぱは，もうおじいちゃんやおばあちゃんの葉っぱだから，栄養が少なくなってしまってちぎれやすくなっているんじゃないかな。」「秋になったら葉っぱが落ちて，冬の準備しているのだと思う。だから色が変わった葉っぱ落ちる前だから，ちぎれやすいのだと思う」と，理由付けしながら考え合うことになった。子どもたちの気付きが，③思考的な気付きへと変容し，④再認識の気付きへとつなげるきっかけとなった。

３．研究の展望　～2年間を見通した計画と単元構成の工夫～

子どもが気付きの質を高めていけるような手立てを探っていく。例えば，季節や時刻による地域の変化に留意し，必要に応じてまとまった活動の時間をとったり，活動の時期を集中させたりるなど，2 年間を見通して，弾力的な単元構成の工夫を行っていく。また，積極的に他教科との関連をはかっていく合科的な指導を取り入れることや，第 3 学年以上の教科への発展性を考慮していきたい。

４．研究の評価

生活科の学びの中で，自己の変容に気付く手立てとして，自己の振り返りによる意識化だけでなく，他者の感じ方や視点にふれることで自己の認識を更新することも大切であると考える。他者の声にも耳を傾け，受け入れることから，互いのよさを認めあえる学級風土作りをめざしたい。

自己の振り返りを行う時には，子どもの様々な表現（言語・絵画・観察の記録など）をもとに気付きの質の高まりをみとっていく。